



フェノロサ夫人の 東京日記

Apr.1897 - May.1900

村形明子 編

岸田夏子 画



に専念、ソファアー・クッションに取り組んだ。

昼食直後アンと私は嫌々ながら、勧められた表敬訪問を数件済ませた。アメリカ公使館各部署の正規のレセプションの日、まずヘロッド夫人の所へ。部屋は満員で、小柄な女主人は意識的微笑と無意識の洪面で飛び回っている。彼女の太った老母が主役のプリマ・ホステス。日本人をこきおろすマクミラン夫人に会う。早々に退出。

次にバック夫人に短い訪問、大佐には会わず、モース夫人に会う。最後に、芝公園の方向のピッカーステス主教旧居に住むライス大佐夫妻。花咲く茂みに縁取られた広い四角い芝生のある快適な住まい。魅力的な人たちで、寸時も私たちの気をそらさない。

着替えて室内をあちこち整え、ナツプ一家（アーサーを除く）を迎えるのにちょうど間に合うよう帰宅。

彼らをウェールズ風トースト「ビール、バター、香辛料等を溶かし混ぜたチーズを塗って焼き色をつけた」の夕食に招いたのだ。この他チキンパイ、ホワイトポテト、いんげん豆、ミンス・パイ「細かく刻んだ干し葡萄等と果皮、りんご、香辛料、砂糖等を混ぜ、ブランディやラムを注いでねかせたミンス・ミートを詰めた」を用意、皆楽しんで

六十八、天皇誕生日〜岡倉の出奔〜『トム・ジョーンズ』読了〜ミレット送別

一八九七年二月二日（火）

南に霊峰富士の見える晴天。文学的作業を避け家事

ようだ。アーサーは彼らによれば、ひどく歯痛がする由。一同長居しなかった。

私たちの部屋で『トム・ジョーンズ』を読んだ。この魅力的な書は終りに近づいている。待ちきれない一方、残念でもある。

一月三日（水）

テンシ サマ（天子様）の誕生日。午後私たちは街の様子を見に出かける予定。彼（天皇）の祝日は霞んだ富士が微笑みながら下界を見下ろす上天気。

午前中故郷宛手紙を書く。五日ヴァンクーヴァー行き郵船が出る。わが小説の第四章を推敲中のアーネストは、火事の場面はかなり興奮して二階へ駆け上がった。彼が改善したことは確かだが、一部扇情的両面的誇張的になってしまったところもある。

昼食直後、私はソファアー・クッションの背面に合う絹を探しにナカドリー（中通）へ出かけた。街路には日本国旗が掲げられ、商店や市場の一部を飾る赤提灯の長い吊綱や花綱が向かい側に架け渡された竿から垂

れ下がっている。赤提灯は国旗の日の丸とマッチするかに見えた。これらの旗の多くは棹の先端に金銀メッキの小球をつけ、二本の棹の交叉点は紫の紐で結つてある。その他は門や家の両側からそれぞれ一竿真つ直ぐに立てられている。最もみすばらしい家や店には一竿の旗しかないが、大小貧富を問わず、城門から層屋までいずこも国旗と天皇の花、菊の鉢をそなえていた。兵士たちは祝賀の新帽を冠るが、硬ばったボール紙、赤紙、金メッキ製の恐るべき代物——本物の帽子は本物の兵士用で、それらは猿か玩具の帽子に見えた。小柄な兵士数人が酔っぱらっていた。一列に腕を組み、互いに支え合いながら九段坂を降りる兵たちはおかしな眺めだった。登って来る士官に軍隊式敬礼をするため、立ち止まって列を崩さなければならなかった。士官はにこりともしない。兵士たちは泣き出さんばかりだった。

中通で持参したサンプルにマッチするものは入手できなかったが、表が緑地に金のモン（紋）、裏は赤錦地のフクサ（袱紗）をソファアー・クッション用に買った。

（一）現在の千代田区神田仲町一〜三丁目にかけて町の中程に東西に延びる中通があった。